えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友 EDO-TOMO

第84号
平成27年
(2015)
3－4

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸・東京の庭園を巡る③　江戸の大名庭園
「六義園」「旧芝離宮恩賜庭園」……1～2
平成27年度古文書講座概要……3
えど友広小路……4～5
会員からの投稿「東京オリンピックの思い出」、「大山道は険路なり、オモガ無くて六根清浄」／えど友サークル紹介／えど友サークルだより／友の会めも
友の会セミナー「大岡越前守と武蔵野新田の開発」……6
友の会セミナー「常設展示リニューアルの概要」……7
見学会「再訪　江戸四宿を歩く―南品川宿」……8
えど東京一景（2）「豊川稲荷」……9
江戸博クリップ「両国といえば…」……9
江戸名所図会を歩く⑱［新田大明神社から六郷渡］……10
催事案内／会員優待のお知らせ……11～12

江戸・東京の庭園を巡る③

江戸の大名庭園
「六義園」「旧芝離宮恩賜庭園」

都立庭園巡りの３回目は、江戸の大名庭園の中でも名園といわれた二つの庭園をご紹介します。
これからの桜の季節、都立庭園でお花見を楽しんでみませんか。

▲しだれ桜（六義園）

▲州浜に立つ雪見灯籠と泉水（旧芝離宮恩賜庭園）

●六義園

５代将軍・徳川綱吉の側用人として名高い柳沢吉保が、駒込の別邸に作り上げた回遊式庭園です。吉保の文芸趣味を反映した「和歌」を基調として、和歌に詠まれてきた景観が取り込まれているのが大きな特徴です。

＜庭園の歩み＞

元禄８年(1695)、綱吉より当地を賜った吉保が造園に着手し、同15年に完成しました。当初は「六義園（りくぎ）」と書いて「むくさのその」と呼ばれていました。園には綱吉の生母・桂昌院や綱吉の長女・鶴姫など数々の賓客が訪れ、工夫を凝らしたもてなしがされた記録が残っています。寛政４年(1792)に３代目当主・信鴻（のぶとき）が亡くなって以降は荒廃していましたが、文化６年(1809)に４代保光が復旧工事を行い甦りました。この時に「新脩六義園碑」が建てられています。幕末には再び荒廃し、７代保申（やすのぶ）の時に明治新政府に上地されました。

明治11年(1878)に三菱財閥の創始者・岩崎彌太郎が購入し別邸を建てたことから、復興が始まりました。修復工事は２代彌之助、３代久彌へと引き継がれ、多くの茶屋が造られるとともに名石が配されました。昭和13年(1938)には久彌が東京市に

寄贈し、一般公開されるようになります。その後戦災で多くの建物が焼失、昭和28年に特別名勝に指定され現在に至っています。

＜園内の見所＞

・八十八境……主に和歌にちなんだ88カ所の景観が園内に散りばめられています。この中には妹山・背山・紀川・片男波・仙禽橋・蘆辺・新玉松・紀川上・吹上濱・藤代峠・擲筆松・能見石といった和歌山県の景勝地が含まれており、大泉水周辺は名勝「和歌の浦」の縮景となっています。また、八十八境の名が記された石柱が32カ所確認されており、これを探し歩くのも一興です。

・藤代峠……標高35ｍの築山で、和歌山県海南市にある同名の峠を模して造られたものです。頂上からは園内の眺望が楽しめ、ちょっとした登山気分も味わえます。

▲渡月橋

・渡月橋……京都の渡月橋ではなく、「和哥の浦 蘆辺の田鶴の 鳴くこゑに 夜わたる月の 影ぞさびしき」と詠まれた和歌から名付けられました。当初は土橋であったようですが、現在は２枚の大石になっており、月ならぬ人が渡る光景は一幅の掛け軸を見るようです。

・しだれ桜……正門から入って内庭大門をくぐった所には、エドヒガン系のシダレザクラの大木があり、開花の時期には数多くの人々が訪れます。昭和30年代に植栽されたものですが、古木のような風格を漂わせています。

・つつじ茶屋……柱や梁がツツジの枝幹で造られた茅葺きの茶屋です。岩崎家時代に建てられたもので、戦前から残る唯一の建物です。紅葉の時期には絶好のビューポイントになります。

▲つつじ茶屋

＜花だより＞

シダレザクラの開花に合わせてライトアップが行われるので、夜桜も楽しめます。また、４～５月には「本霧島」をはじめとする古品種のツツジが園内を彩ります。

●旧芝離宮恩賜庭園

小石川後楽園とともに、東京に残る最も古い大名庭園の一つです。潮入の池であった泉水は現在淡水の池となっていますが、大小の島が浮かび、さまざまな石組や灯籠などが配されて、変化に富んだ景観を見せています。

＜庭園の歩み＞

延宝６年(1678)、老中・大久保忠朝が４代将軍徳川家綱より芝金杉の地を拝領、「楽壽園」と名付けられた庭を造りました。この時に西湖の堤、蓬莱島の石組や州浜・砂浜などが設けられ、現在の庭の原型が形作られています。文政元年(1818)に大久保家が邸地を返上した後は、堀田家上屋敷、清水家下屋敷を経て、弘化３年(1846)に紀州徳川家の「芝御屋敷」となりました。

▲根府川山の石組

明治新政府の取得後は有栖川宮(熾仁親王)邸、英照皇太后「非常御立退所」を経て、明治９年(1876)に芝離宮となりました。明治24年には洋館が建てられ、迎賓館の役割を果たしていましたが、大正12年(1923)の関東大震災で多くの建物や樹木が消失しました。翌13年に東京市へ下賜されて一般公開され、現在に至っています。また昭和54年(1979)には名勝指定を受けています。

＜園内の見所＞

・泉水……かつては浜離宮と同様に潮入の池で、海の干満によって変化する景色が楽しめました。池の周囲には州浜や砂浜が設けられており、実際の海岸のような趣があったと思われます。周辺地域の埋め立てに伴い、現在は淡水の池となっていますが、海水取入口にその名残を見ることができます。

・石組の庭……多彩な庭石が変化に富んだ景色を作り出しています。根府川山・蓬莱山(中島)・唐津山の組石や、枯滝・石柱・飛び石などの石造物が随所に配され、見応えがあります。これらの石の多くは大久保家の領地があった小田原周辺から運ばれたものです。

▲西湖の堤

・西湖の堤……中国の杭州にある西湖の蘇堤を模した石造りの堤で、蓬莱山とともに当時の中国趣味を反映しています。小石川後楽園の堤は立ち入り禁止ですが、こちらは「堤渡り」が体感できます。

＜花だより＞

園内にはソメイヨシノとサトザクラの木があり、これからの時期、長期間にわたりお花見が楽しめます。また５月にはフジ・アヤメ・カキツバタが咲きそろいます。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

※参考資料

東京都公園協会発行『六義園』『旧芝離宮恩賜庭園』

平成27年度［古文書講座］の概要とご案内

ご好評をいただいている古文書講座の平成27年度の内容を3人の講師にご紹介いただきました。

◆入門編（担当：田中潤講師）
（学習院大学非常勤講師／現在力を入れている研究テーマ：近世・近代文化史。有識故実（服飾・染織等）、江戸幕府御用絵師研究など）

○受講対象者・レベル：歴史や美術にも関心を持ち、身近な文化施設・生涯学習施設・美術館・博物館などに足を運ばれた方は、江戸時代や明治・大正・昭和戦前期などに書かれた、活字と異なり一見読み取りにくい「くずし字」の壁に直面されたことが多いと思います。人々は、文字との出合い以来、文字を用いていかにして自らの意思を相手に伝え、その内容を後世に伝えようとしてきたのでしょうか。その足跡を「くずし字」で書かれた古文書（こもんじょ）は、鮮やかに今日の我々に伝えてくれます。電話やメール、パソコンと我々の生活は密接不可分なものとなり、「手書き」で文字を書く文化は後退したように思えますが、美しく文字を表現したいという欲求はパソコンのワープロソフトにみられる文字フォントの多様性からも我々の中に根強く残っています。この講座では、これまで全く古文書を読んだことのない方、すでに読める方でも、基礎から確認をなさりたい方なども歓迎し、全くの初心者の方に合わせた進度で講座を進めます。講座では簡単なくずし字で書かれた古文書などを題材にして、古文書に書かれた字の『くずし字辞典』での調べ方、基本的な文字の読み方など、古文書を読んでいくために最低限必要となる基礎的な知識についても、テキストに添いながらご紹介していきます。そして、博物館・美術館に展示された古文書をより親しみをもって見ていただけるように、書かれた文字だけに留まらない古文書の背景の広がりについても触れていきます。

○講座の進め方：最初に史料を素読し、適宜くずし字の解説を行います。その後、史料内容についての解説を行います。使用史料は基本的に事前に1期分（計3回分）を一括して配布し、受講者の方々が受講以前に目を通していただいた上でゆっくりと進めていきたいと思います。

○使用史料：『東都歳事記』を基本史料として、都市としての江戸を中心にその他の関連する史料や仮名で書かれた和歌なども適宜取り上げます。

◆初級編（担当：安藤奈々講師）
（学習院大学大学院史学専攻／現在力を入れている研究テーマ：近世対外関係、琉球。特に身分制度などの社会構造）

○受講対象者・レベル：本講座では、基本的なくずし字が読める方を対象にしていますが、入門と中級の架け橋となるよう、心がけていきます。

○講座の進め方：初回に1期分のテキスト（3回分）を配布し、各回で内容・背景知識を解説し、その後史料読解に入っていきますが、文字解説など重点的に行います。2回目以降は予習をしたうえで受講をしていただきたいと思います。また、くずし字だけでなく、江戸についての知識や近世文書の読み癖もつけられるように、関連する活字史料も取り上げ、幅広く江戸時代に関する知識を深められるように進めていきます。

○使用史料：基本的には『旧幕引継書』などに含まれる江戸に関する史料をテキストとしますが、その他幅広く題材としていきたいと考えております。

◆中級編（担当：吉成香澄講師）
（豊島区教育委員会非常勤職員／現在力を入れている研究テーマ：将軍姫君の婚姻と幕藩関係、江戸城大奥）

○受講対象者・レベル：本講座では、基本的なくずし字が読める方を対象にしています。

○講座の進め方：初回に全回分のテキストを配布し、各回でレジュメを配布します。各回ではテキストを読みあげて適宜くずし字の解説を行います。江戸時代の古文書を読むにあたり、抑えておきたい字などを対象とし、基礎的なものについては必要最低限にとどめます。また、古文書の形態や用語などについても、適宜解説を行います。本講座では、史料内容の解説をより専門的に行い、より深く史料を理解することをめざします。扱うテキストは、江戸幕府関係のものが主になります。

○使用史料：『丹鶴城旧蔵幕府史料』（ゆまに書房）、『内閣文庫所蔵史籍叢刊』（汲古書院）などの幕府史料。

○史料の内容：幕府の諸役所で作成された記録類。

◆新年度は5月から開講

古文書講座の新年度第1期は5月から下記日程で開講します。申込はがきは1講座ごととして、申込の受付は3月末までです。多数の皆さんのご参加をお待ちします。また、各講座とも午後の時間に余裕があります。

◆入門編
・講師：田中潤さん
・開催日：5/13（水）、6/10（水）、7/1（水）

◆初級編
・講師：安藤奈々さん
・開催日：5/20（水）、6/17（水）、7/15（水）

◆中級編
・講師：吉成香澄さん
・開催日：5/16（土）、6/13（土）、7/18（土）

〔各講座とも共通〕
- 時間：午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
  （注意）午前の講座か、午後の講座かの希望を明記
- 会場：江戸博1階会議室
- 定員：80人（会員のみ）
- 参加費：全3回1500円（初回一括払い）

【企画担当責任者】宮　俊（事業部会）

会員からの投稿

東京オリンピックの思い出

須賀　靖

50年前、百貨店に入社した私は、あの夏、渋谷駅から代々木公園の方へ通っていました。ゆるやかな坂道を登りつめたあたりに、小高く平らな丘のような所があり、そこに選手村が建設されていました。そこへ通っていた時のことが、まるで昨日のことのように思い出されます。選手村には、選手たちが気軽に買物ができるように店舗が設けられ、私はそこで仕事をしていました。まわりに緑の芝生が広がり、青空に白い雲がゆっくりと流れ、さわやかな風もあり休憩時間に芝生に腰を下ろし、仲間や外国人とおしゃべりするのは楽しいものでした。テレビやラジオでオリンピックのニュースが、連日にぎやかに報道されていましたが、これ以外はなぜかあまり思い出せません！

この思いと共に、ずっと持ち続けられた興味と関心は、マラソンに関することです。特にアメリカのデンバーや中国の昆明など、その後の日本の選手がトレーニングをするようになった場所です。その発端は、私が担当するケースの前に、ある日突然誰もが知っていた裸足（はだし）の王様・アベベがひょっこり現れたことです。びっくりしてあわててしまいTシャツ1枚売り込めませんでした。彼は無口でほとんどしゃべりませんでしたが、あの精悍な姿は、今でもハッキリ覚えています。彼との出会いがなかったら、マラソンにそれほど興味も関心も持たなかったでしょう。あの時、イタリア語で話しかけていたら、3枚くらい売れたかもしれません。

あれから半世紀、何とまた東京でオリンピックが開催されます。今度こそは、いつどこでどんな人にあっても、そのチャンスを逃がしたりしません。心行くまで昔の東京、今の東京を話してあげるつもりです。もしその人がロンドン、ニューヨーク、北京、パリなど古い歴史のある大都会の人であったら、200年前の街の人の暮らしぶりがどんなものであったのか、お酒を飲みながら、あれこれ語り合いたいものです。なぜなら私も、1ドル360円の頃、初めてヒューストンに行った時、街に入ったら、馬がバーにつながれているようなバーで飲みたいと思っていました。ところが街に近づき目に飛び込んで来たのは、高層ビル群でした。あの時受けたカルチャーショックは、今でも消えません！　富士山（フジヤマ）・芸者の印象で来る人がいるものかいないものか、それは興味津々です。

大山道は険路なり、オ毛ガ無くて六根清浄

田中文彬

74歳の挑戦にしては、ちょっと無謀だったかな。いや、昨年11月下旬「『落語で江戸散歩』をなぞる会」の大山詣りに飛び入りで参加した時のこと。大山は2回目なので、今回はグループを離れて上社（山頂1252m）まで登ってみたいと思っていた。決め手は、昼食の席で周りの女性会員から「電車チケットは2日間有効、ここで泊まって明日登れば」と焚きつけられたこと。望みをかなえる無二のチャンスと思った。

下社（大山阿夫利神社下社）までは皆とケーブルで登り、そこで一行50余名は参拝し、散策して解散となり、それぞれケーブルで降りて行った。私は残って参拝者と話をしたり写真をとってあげたりして交流した。社殿の前には大きな炉が据えてあり皆が暖を取っていたが、9時頃若い神職が炉に水をかけて行ってしまった。私は階段下のお茶屋さんで腹ごしらえをして、店から大きなビニールの袋と新聞紙を何枚かもらって茶屋の軒下のベンチで野営の準備をした。学生時代から日本アルプス縦走やBackPack旅行などで野営には慣れている。1時間ほどうとうとしたものの、寒くて寝られない。冷えて筋肉が固まってしまうのを避けるため、ほぼ夜通し星明りの参道の石畳を歩き回った。

朝早く食事を求めて下の町に降りかけたが、切り立った急な階段で怖くて断念、結局8時になって茶屋の1軒が店を開けたので朝食をとり、8時半ごろ大山登山開始。下社の左側の登拝門をくぐり、少し階段を登った後は岩道。結論からいうと、大山道は大変な険路だった。大小の岩が道を塞ぎ、紆余曲折、ごつごつグラグラ、時々滑る。全くリズムがとれない。今まで日本アルプスや富士山に何度も登ったがこんな歩きにくい道はなかった（ように思う）。とにかく、頂上まで一寸の下りもなく、傾斜は15～30度かそれ以上で、登り一辺倒。2時間以上も喘ぎ喘ぎ登った頂上には予想以上にたくさん人がいて記念写真は順番待ち。立派な社殿があり、江戸期からの信仰の山であることをしのばせている。

展望台に行くとガスの切れ目から仰角30度に真白い富士が見えた。空に溶けてコントラストは低かったが、神々しかった。赤人の万葉歌の世界だ。下りには90分は必要で、登りよりずっと危ない。朝食の店で借りた五尺の八角棒は命の杖、膝が救われた。

お怪我は無くて六根清浄、お山は晴天。大山道は険路なり、オ毛ガ無くて六根清浄。

えど友 サークル紹介

◤江戸を語る会◢

サークル紹介の９回目は、平成25年11月発足の「江戸を語る会」です。世話人の須賀靖さんを中心に、偶数月に活動を行っており、現在の会員数は15人です。会員が交代で江戸に関するテーマを自由に設定して講演を行い、その後で相互に意見交換を行っています。ユニークなのは次回の発表者とテーマは決まっておらず、当日希望者を募ることです。会合の席上では決まらず、その後の飲み会で決まることも多いとか。過去には江戸の町名、浮世絵、医療小史、吉原遊郭が取り上げられています。

▲三味線の音色を聞く

取材をした12月27日(土)は、新内節の太夫である富士松松栄太夫(ふじまつしょうえいだゆう)さんが「芸能演奏と身分制」と題する講演を行いました。参加者は11人。「浄瑠璃(物語に節付けした三味線伴奏による語り)」の系統の説明、「豊後節(新内節のルーツ)制止令」と「相対死(心中)禁止令」との関連、「浄瑠璃本」に対する出版統制の基準が当時の身分制と深く関わっていること、などが豊富な資料を駆使して語られました。講演後には三味線を使っての「豊後節」の音程解説や、吉原遊郭における呼び込みの口上と新内流しの実演があり、まるで富士松さんの独演会を聴いているようでした。

質疑応答も和気あいあいで、会員が心から楽しんでいる様子が伝わってきました。また、専門的な知識や技能を持っておられる方も多く、本当に「江戸を語りたい」人たちの集まりなのだと改めて思いました。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

12月８日(月)9、10、11代の３代にわたる桂文治が演じる噺を鑑賞。それぞれの噺に各代の文治の個性が表れていた。参加者16人。

1月14日(水)春風亭柳昇の「与太郎戦記」、6代目松福亭松鶴の「欲の熊鷹」など、江戸落語と上方落語の今は亡き名人の高座をDVDで鑑賞した。参加者19人。

◆藩史研究会

12月10日(水)村田勝さんが「遠江国　浜松藩」の発表を行った。古代・中世から近世にかけての浜松の歴史を概観。全体図を使っての浜松城の様子や東海道の裏街道として賑わった姫街道のことなど、さまざまなエピソードが語られた。参加者15人。

1月９日(金)静岡の中央部に位置する相良藩が田沼意次の領地であることを知る人は少ない。老中田沼意次が行った政治を再考する視点から西村英夫さんの発表が行われた。参加者20人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

12月11日(木)八丈島の島役人長戸路家に伝わる御用留(明和～寛政まで)のP38～47を解読した。参加者８人。12月26日(金)休会。

1月23日(金)同じくP48～50、P55～59を解読。参加者８人。

◆『江戸名所図会』輪読会

12月18日(木)杉村義三郎さんの担当で、国立市谷保にある谷保天神社と別当寺の安楽寺を中心に解説された。参加者20人。

1月15日(木)50回目となる輪読会は、國定美津子さんが担当。豊富な資料を使いながら古刹普済禅寺をはじめとする立川市芝崎４丁目から２丁目にかけての寺社の説明がなされた。参加者20人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

12月18日(木)『えど友』第48号10頁の「落語で江戸散歩⑦井戸の茶碗」をなぞって歩いた。出発は東京メトロ白金高輪駅、最後は御府内八十八カ所一番札所の高野山東京別院を参拝してから「食とくらしの小さな博物館」と「物流博物館」を見学して品川で解散。参加者34人。

12月21日(日)1回目と同じコースを巡ったが、最後は高野山東京別院で開催中のインド古典舞踊を鑑賞して解散。参加者42人。

1月休会。

◆日本の大道芸伝承会

12月５日(金)発声練習(ういろう売り、がまの油売り)の後、南京玉すだれの練習。参加者３人。12月17日(水)発声練習の後、南京玉すだれの練習。参加者３人。

1月20日(火)深川江戸資料館で３月21日に開催される「江戸の物売りと大道芸シリーズ」への参加が決定した。発声練習の後、南京玉すだれ、物売り等を練習。参加者３人。1月29日(木)も同様の練習を行った。参加者３人。

◆江戸を語る会

12月27日(土)発表者の富士松松栄太夫さんは和服姿で登場、音曲も交えた発表となった。浄瑠璃の歴史的流れから始まり、浄瑠璃が江戸時代にどのような地位にあったか語られた。参加者11人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の２サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成26年12月～平成27年1月

◆役員会12月9日(火)15人。1月13日(火)13人。◆事業部会12月2日(火)26人。1月6日(火)23人。◆広報部会12月16日(火)11人。1月20日(火)10人。◆総務部会12月23日(火)25人。1月27日(火)19人。◆町方書上翻刻プロジェクト12月4日(木)A７人・B休会。12月18日(木)A・B合同索引編集会議13人(市川先生、A・B共各6人)。1月はA・B共、自宅にて各自総索引の見直し作業。

第148回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成26年12月20日）

大岡越前守と武蔵野新田の開発

講師　真下祥幸さん（江戸東京博物館学芸員）

南町奉行大岡越前守忠相といえば

テレビ時代劇では江戸の町人と親睦を深める優しい奉行で、遠山の金さんと並ぶ名奉行、名裁判官として描かれています。そのイメージが作られたのは大岡没後まもなく創作された『大岡政談』からで、江戸時代から庶民に人気があったようです。しかし、実際には町奉行の職は裁判のような司法だけではなく、行政官としての役割も多く、大岡忠相の町奉行としての成果は、8代将軍吉宗が行った享保の改革として知られる『公事方御定書』の編纂などの法の整備、吉宗が米将軍とも呼ばれることになった諸物価対策、小石川養生所・火除け地・目安箱の設置といった都市対策などが史実として残されています。

大岡は延宝5年(1677)、1700石の旗本大岡忠高の四男に生まれ、のち1920石の同族大岡忠真の養子となります。書院番などを歴任後伊勢山田奉行となり、享保2年(1717)には40歳の若さで町奉行に登用され、越前守に。その後寺社奉行まで進み、併せて加増を重ねることで、最終的には旗本から1万石の大名となりました。宝暦元年(1751)、前年没の吉宗の後を追うように75歳で亡くなりました。

町奉行と地方御用掛

江戸時代、町奉行所は北と南に分かれており、1カ月交代の月番制になっていました。月番とは片方の奉行所は開門して訴訟などを受け付け、その間もう一方の奉行所は門を閉ざし、開門中に受け付けた訴訟を審議するというものです。各奉行所の構成人員は与力25人(騎)と同心120人というもので、この体制で江戸の治安を守っていたので、町奉行はほとんど休みも取れない激務だったようです。

通常の町奉行職でも大変ですが、これに加え、大岡には当時幕府の最大の課題であった年貢増収を目的とした新田開発も申し付けられました。これは「関東地方御用」という、関東周辺の新田開発を担当するものでした。享保7年(1722)北町奉行中山時春と南町奉行大岡の両名がこの役を命じられましたが、中山は1年で町奉行を辞めたため、以後は大岡がひとりで担当することになります。大岡はこのとき身分にこだわらず有能な人物を登用しました。代官上坂政形は元町奉行所の与力であり、田中喜古・喜乗親子、蓑正高、川崎定孝など武士以外の身分の者も登用しています。

武蔵野新田の開発

享保7年、日本橋に高札が掲げられました。概略は「開発する場があれば…関東は江戸の町奉行へ申し出てその許可を受けよ」と、中山・大岡の連名で新田開発の方針が出されます。武蔵野新田開発の1期は同年に始まり、代官の岩手信猶、荻原乗秀の下で手代の小林平六、野村時右衛門が推し進めました。2期は享保17年(1732)からで、大岡は与力の上坂を代官に取り立て、配下に田中親子、蓑などを置き、公金貸付や検地を行うなど生活の安定を図りました。3期は元文4年(1739)以降で、凶作に対し私財を投じて農民扶助を行ったことが評価された押立村(府中)名主、川崎平右衛門定孝が新田世話役として抜擢されます。

開発の行き詰まり

武蔵野新田は享保年間に開発が始まりましたが、必ずしもその道のりは順風満帆ではありませんでした。武蔵野新田では享保12年(1727)に家作料、開発農具料を支給するなどの保護をしたのですが、反面厳しい年貢の取り立てを行ったことで、結果的に新田は疲弊していきます。

元文元年(1736)に上坂による検地を受けた際には、年貢の過剰負担や凶作などで開墾地を手放す百姓もおり、元文4年には潰れ百姓といって1割以上が離村しているような状況でした。

武蔵野新田の保護

このように疲弊した武蔵野新田を救済すべく、大岡は上坂を代官としました。上坂は幕府の公金を富裕層に貸し付け、その利息を新田側に支給しました。元文4年に新田世話役となった川崎は武蔵野新田の南北2カ所に陣屋を建て、生活状況を確認し、離村者に立帰金を支払う、養料金を支給するなどの政策をとりました。また溜雑穀といった百姓に肥料を貸し付け、その返済として納めさせた収穫物を貯穀して凶作時の対応としました。

玉川上水と武蔵野新田

ではなぜ、武蔵野一帯は江戸時代中期になるまで開発が行われなかったのでしょうか。その理由は台地のため水の便が悪く人が定住できなかったことが一因でもあります。これを解消したのが玉川上水です。4代将軍家綱の頃に江戸の人口増加に伴い開削された玉川上水は、本来江戸市民の飲料水として引かれましたが、新田開発政策にあたり、武蔵野新田にも多くの分水を引く許可がおりたのです。このようにさまざまな苦難を経て成立した武蔵野新田ですが、江戸時代後期になると江戸との距離も近いことから、分水には多くの水車が設置され、麦などを製粉し江戸で販売するようになり江戸とのつながりを深めていきました。

レポーターからひとこと

ご専門は江戸時代の農政史とか。以前見学した穀倉の背景が浮かび、また、バスツアーで訪れた「野火止用水」などもお話の中にあって興味深くお聞きしました。　参加者124人。

【記録】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・福島信一

第149回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成27年1月24日）

「常設展示リニューアルの概要」

講師　新田太郎さん（江戸東京博物館学芸員）

リニューアルは、次の３項目を重点に行っています。

①劣化した設備や機器の更新と陳腐化した展示手法の改善。

②研究成果及び資料収集、展覧会、カルチャーなど江戸博の事業成果の取り入れ。

③展示対象の見直し、学校団体や旅行者等、開館時に想定していなかった来館者への対応と、バリアフリーの充実。

具体的に、リニューアルの内容をご紹介します。

江戸城と町割り

江戸城の規模と範囲をイメージしていただけるように幕末の「江戸城本丸二丸御殿」を模型(1/200)で展示します。直径5.3mの円形の展示になり、それぞれの角度から見える建物の構造、御殿の機能、儀礼の様子を映像とパネルで紹介します。また、正面の展示ケースに屏風仕立てで土地利用の変遷を紹介するパネルと土地利用構成を示した映像を設置します。

町の暮らし

長屋の生活により臨場感を持たせて理解できるよう京橋柳町にあった長屋の図面をもとに長屋１棟分を全復元し、井戸、雪隠（せっちん）、ごみ溜め、稲荷なども追加して展示します。長屋は、既にある指物師の部屋、棒手振（ぼてふり）商人の部屋の他に大工の部屋、寺子屋の師匠の部屋、着物の洗い張りを生業とする女性の部屋を追加して、庶民の暮らしぶりを紹介します。寺子屋には人形５体を入れます。一部空間を入室可能にします。

江戸の商業

実物資料、体験模型、環境造形により構成し、江戸の経済生活を学べる体験と休憩のスペースを設けます。すし屋台、そば屋台(夏は風鈴に替わります)を配置し、すしのサンプルを置いて手にとれるようにします。魚と野菜のサンプルを入れて棒手振りの体験ができるようにします。

江戸と結ぶ村と島

教育現場の要望が高い「玉川上水」コーナーを設け、江戸の水道について総合的に紹介する模型を展示します。江戸地廻経済圏模型を刷新し、壁面に60インチのモニターを６連にした大型画面を取り付け、江戸近郊の物流と農産物の紹介をします。

江戸の四季と盛り場／文化都市江戸／江戸の美／芝居と遊里

映像で江戸の年中行事を紹介して庶民の文化的な活動を分かるようにします。芝居小屋の構造や歌舞伎の演目を映像作品やパネルで紹介。ボタンを押すと助六の名セリフが聴けるようにします。

江戸から東京へ（新設）

幕末維新期における江戸東京の情勢を勝海舟の行動から紹介します。江戸博ならではの幕末維新展示を実現し、海舟の人物を追った解説映像とタッチパネル式の事件史年表を展示します。

文明開化東京／殖産興業と東京

鹿鳴館・ニコライ堂模型に解説映像を追加。ニコライ堂・銀座煉瓦街模型の演出をリニューアル。銀座煉瓦街模型の設置高さを30cm下げ、低い目線からでも街並みが俯瞰（ふかん）できるようにします。華やかな煉瓦街の裏側では市井の生活が続いていたことが見られるようになります。

市民文化と娯楽

凌雲閣模型に人形、屋上アーク灯、内部照明、入口付近の幟などを追加設置し、当時の賑わいを伝えられるように改修します。凌雲閣からのパノラマ写真があるので、それと対比できるように同じ高さから撮影した現代のパノラマ写真を展示します。

関東大震災

関東大震災における火災の延焼動態を示す地図模型を設置します。水害・治水に関連して荒川放水路(荒川)についての展示を行います。

モダン東京

市域の拡大や人口の変化、交通網の変遷を示す地図模型を設置します。

空襲と都民／よみがえる東京

既存映像作品へ開館後に収集した映像資料を追加・再編集します。

高度経済成長期の東京（新設）

戦後の衣食住などの変化をより細かく展示します。ひばりが丘団地の２ＤＫの１室(部分)を移築復元し、郊外住宅地の発達と消費型生活への変化を紹介します。東京オリンピックの展示コーナーを充実し、当時の盛り上がりが感じられるような展示にします。

現代の東京（新設）

公害、廃棄物などの都市問題とその対応を紹介し、都市生活の変化を紹介します。東京の都市構造の変化と、生活や流行、趣味や娯楽の変化を年代(1960、70、80、90、2000年代)ごとに紹介します。

ミュージアムラボ（体験コーナー）

好評を得ている体験住宅に中廊下を追加、屋根をつけるなどの改修を行い、臨場感と安全性を向上させます。隣接して各種ワークショップや特別解説などのスペースを拡充します。

全体的な変更

照明機器はＬＥＤに替え、展示パネルを見やすくします。パネルのタイトルには英訳をつけます。サイン、解説パネル、タブレットを使って多言語対応を図ります。タイルカーペットの色は新しく数色使い分け、室内の印象にメリハリをつけます。

レポーターからひとこと

スペースの関係で話されたリニューアルの全てをご紹介することはできませんでした。リニューアルオープンが楽しみになりました。　参加者95人。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 26 年 12 月 7 日）

「再訪　江戸四宿を歩く―南品川宿」

今回は、江戸四宿の一つ品川宿のうち、南品川宿（目黒川を挟んだ南側）を見学します。

鈴ヶ森仕置場（刑場）跡～旧土佐高知藩下屋敷跡

京浜急行大森海岸駅に集合し、まずは旧東海道に入り、鈴ヶ森仕置場（刑場）跡を見学します。江戸時代には、江戸の北の入口（日光街道）沿いに設置されていた小塚原仕置場（刑場）とともに、南の入口（東海道）沿いに設置されていたのが鈴ヶ森仕置場（刑場）です。開設は慶安４年（1651）で、明治３年（1870）に閉鎖されました。隣接の大経寺には磔、火炙りの台石や首洗いの井戸などが残されています。ここから旧東海道を北上して、立会川に架かる浜川橋（汨橋）へ。江戸時代、罪人は家族とここで別れたといわれる場所です。次は、浜川

▲鈴ヶ森仕置場跡

橋を渡り勝島運河に面した浜川砲台跡へ向かいます。嘉永６年（1853）浦賀沖にペリー率いる４隻のアメリカ軍艦が投錨したので、土佐高知藩鮫洲抱（かかえ）屋敷内に砲台を築いた場所です。礎石がこの付近で発掘され保存されています。ペリーが２度目に来航したときは、坂本龍馬も砲台要員として配属されていました。江戸時代はこの辺りまで海岸だったことが、広重の『名所江戸百景』、「南品川鮫洲海岸」に描かれています。京浜急行立会川駅の西側には江戸時代土佐高知藩下屋敷がありました。

大福生寺～品川寺

旧街道を離れ第一京浜を渡り高台へ、大福生寺（大井の聖天様）を詣で、来福寺へ。正歴元年（990）智辯僧侶により開基されました。鎌倉時代に源頼朝が亡くなった兵士の霊を慰めるため写経を収めた経塚がありました。文亀元年（1501）に僧梅巌が経塚の近くを通りかかると土中より読経の声がしたので掘って見ると地蔵尊像が出てきました。調べてみると長い間行方不明になっていた来福寺のご本尊と分かり、改めて寺に安置しました。このことからこの像は経読地蔵尊と呼ばれるようになりました。経塚は大井１丁目に来福寺の庚申堂として残っております。高台を下り国道を北に進むと左手には旧仙台藩下屋敷跡です。昭和26年（1951）（財）仙台育英会がこの地を東京都より借り受け仙台出身の若者の寮（育英会五城寮）を造り、昭和59年（1984）閉鎖されるまでに464人が巣立っていきました。坂道を左手に登ると、15代土佐藩主山内容堂の墓があります。この地は下総山と呼ばれ、下総が望めたようです。土佐藩の屋敷になってからは土佐山とも呼ばれました。この山を下りて、しばらくは第一京浜を通り、海晏寺（紅葉の名所）前から旧東海道に戻って、品川寺（ほんせんじ）へ。開基は大同年間（806～10）と伝えられます。境内には江戸六地蔵の一つ、銅造りの地蔵菩薩坐像（宝永５年・1708建立）があります。鐘楼の梵鐘（明暦３年・1657鋳造）は慶応３年（1867）にパリ万国博覧会に出品の後、行方不明になっていましたが、昭和初期にジュネーブの博物館に保管されていることが分かり、昭和５年（1930）に返還されました。洋行帰りの鐘として知られています。

▲大福生寺の大聖歓喜天

脇本陣釜屋跡～海徳寺

南品川宿の脇本陣釜屋跡が品川寺の向側にあります。この釜屋は、幕末には本陣のような構えに改造、幕府御用宿となりました。慶応３年には幕府関係者や新選組土方歳三等の滞在も記録にあります。このあと、東海道の面影を甦らせようと保土ヶ谷宿等からの好意で寄贈、植樹された松数本を眺めながら、問屋場貫目改所（といやばかんめあらため じょ）跡へ。ここは正徳２年（1712）に、東海道の物資の往来を統制する問屋場と、荷の重さを検査する貫目改所が設けられた場所です。問屋場貫目改所は東海道品川宿、府中宿、草津宿の３カ所に設けられました。このあと目黒川に架かる品川橋へ、脇本陣百足屋（むかでや）跡（現城南信用金庫）を見て、目黒川北岸の荏原神社の説明を受けました。この社は元々目黒川南岸にあった南品川宿の鎮守です。目黒川の改修により現在の位置になりましたが、今も南品川宿の鎮守として守護しています。最後に海徳寺へ、境内には軍艦千歳殉職者の碑と、元巨人軍の王貞治選手と心臓病の少年がホームラン王になる約束をしたという微笑ましいエピソードに由来する、ホームラン地蔵があります。

▲浜松より寄贈された「東海道の松」

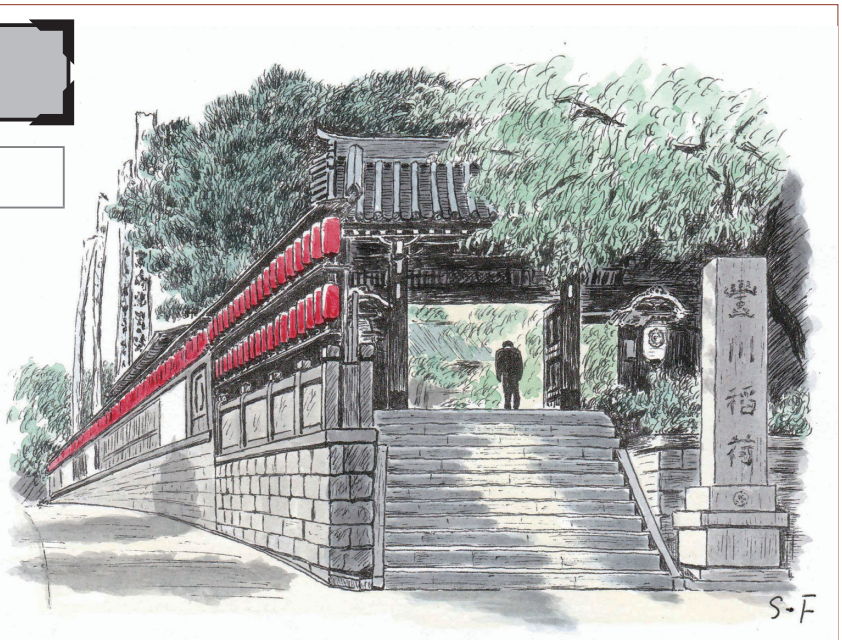
本日の見学会は以上で終了し、京浜急行新馬場駅前にて解散しました。

参加者124人。

【記録】文：広報部会・田端道宏
写真：同・菊池真一

えど東京一景

(2) ー豊川稲荷ー



俗に「鰯の頭も信心から」というように日本の農山漁村にはいろいろな信仰があります。安産の神様、子育ての神様、火伏せの神、イボ取り、やけど等、神様からおまじないのようなものまで、その多くは田圃の中に立つ祠であったり、神社の脇の小社であったりします。農村地帯ではそのような小社は多くお稲荷さんと呼ばれるようになり、従ってお稲荷さんは全国的に非常にたくさんあることになります。その中の頂点にあるのが京都伏見の稲荷大社です。なにしろお稲荷さんの総本山的なもので、ある時お祭りを見ていたら渡御していた御神輿が日通の小型トラックに乗って帰ってきました。御神輿が重くて毎年けが人が続出するので、担がないようにしたのだそうです。江戸っ子とは異なる、関西人らしい合理主義ですね。

伏見の稲荷大明神を祭るのとまったく異なる大きな派閥があります。それは三河の豊川稲荷を本社とするもので、こちらの本尊は荼吉尼天というインドの神様です。インドの神様を恐れることはありません。七福神だって恵比寿様以外は全部インドと中国の神様です。ダキニテン、という音の感じが恐ろしい？　確かにダキニテンの神罰は恐ろしいのです。しかし、神罰専門では信者はついてきません。福も多く与えて下さるのです。豊川稲荷の東京別院は赤坂にあります。元は大岡邸の屋敷神として荼吉尼天が祭られていたのだそうです。お守りをいただくと、荼吉尼天の画像がありました。冠を頂いた妖艶な美女が狐に乗って飛んでいます。下半身は狐に横座りして白い脛があらわな、セクシーなものです。

【取材】イラスト：広報部会・福島信一
文：同・佐藤幸彦

江戸博クリップ

「両国といえば…」

展示事業係学芸員　真下　祥幸（ましも　よしゆき）

早いもので江戸東京たてもの園から江戸東京博物館に異動してきてから間もなく5年になろうとしています。両国の地にも慣れ、お昼を食べに行く場所もとりあえず1カ月は毎日違う場所に行ける程度にはストックができました。

さて、そんな両国ですが、両国のイメージってなんでしょう？　一般的にはお相撲さんとちゃんこの街でしょうか。「和」ですね。

ここで、ちょっと丸の内、渋谷、浅草という三つの街に対する私の個人的なイメージをあげてみます。丸の内は、よくテレビをみていると、東京駅を出て会社に向かうサラリーマンの波が映される企業の街。渋谷といえば、なんといっても若者の街ですよね。私も若いころは随分渋谷に足を運びましたが、最近はさっぱりです。浅草は地元の方、観光の方が多く集う賑やかな下町のイメージですね。

ではこれら三つの街を代表する建物といえば何を思い浮かべますか？これも私の勝手な意見ですが、丸の内は東京駅と丸ビル。渋谷は現在ですとヒカリエやマークシティなどもありますが、やはり道玄坂下のY字路に立つ109。浅草は浅草寺、仲見世、雷門のあのラインですね。

街を構成する要素は、そこに集まる人々の雰囲気や地域的・地理的条件、自然環境などさまざまだと思いますが、その街をあまり知らない方にとっては、建造物は街をイメージするのに重要な指針の一つだと思います。特に巨大な建造物の登場は街の雰囲気を一変させるのではないでしょうか。

両国に江戸東京博物館が開館したのは平成5年3月28日、間もなく丸22年となります。「両国といえば…」と問いかけたとき皆さんは何を思い浮かべるのでしょうか。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…⑱

[新田大明神社から六郷渡]

六郷神社の狛犬

前回の鵜の木村光明寺の続きは南北朝時代の武将、新田義興を祀る新田大明神社からです。品川の東海寺から始まった巻之二天璇之部も、いよいよ今回は多摩川までやってきました。

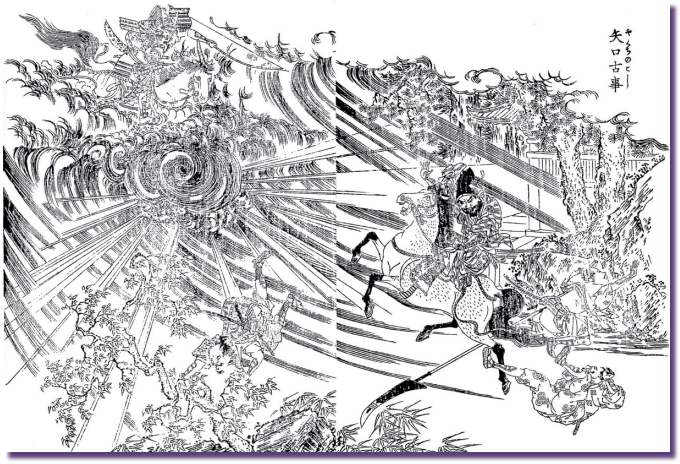
新田大明神社から十騎社

東急多摩川線の武蔵新田駅で下車すると大きな商店街があり、発展門、ふれ愛門、未来門、希望門とそれぞれのエリアに大きなアーチがかかっています。新田神社はその未来門エリアにあり、駅から3分ほどで着きます。祭神は矢口の渡しで非業の死をとげた新田義興で、その祟りを鎮めるために矢口村の人々が義興を埋葬した塚に一社を造立したのが始まりといわれます。ここは拝殿のみで、本殿はありません。しかし、社殿の裏に古墳があってここが義興の墳墓と伝えられています。拝殿の左側には延享3年(1746)に水戸徳川家の支流である松平頼寛が建立した「新田神君の碑」があります。上段の篆題は頼寛、本文の選者は服部南郭、書は松下烏石で、図会では「古廟碑」とありその全文を書き起こしています。

新田義興と共に矢口の渡しで憤死した10人の家臣が祀られている十騎社、現十寄神社は新田神社を出て右にまっすぐ5分ほど歩くと左側にあります。「此所も拝殿のみにて本社は一堆の荒塚のみなり」とありますが、ここには拝殿の後ろに塚らしきものはありませんでした。江戸時代には徳川家の祖先が新田氏系であるということから武士の参詣が盛んで、先に十騎社、それから新田大明神社に参拝しないと願いが叶わないといわれたことが『四神地名録』に書かれています。

古川薬師堂から大綱山光明寺

十寄神社からほぼ道なりに10分ほど歩くと多摩川土手に出ます。左側に東八幡神社があり、鳥居の脇に「矢口の渡し跡」の碑がありました。そこからさらに多摩川の河川敷を20分ほど行くと、川が大きくカーブするあたりに古川薬師堂の大屋根が見えてきます。12月に歩いた時は富士山もくっきりと見えて、お散歩にはうってつけでした。「古川村にあり。新田明神より東南の方二十丁ばかりを隔つ」とある古川薬師堂は安養寺という新義真言宗のお寺です。門前にある薬師道の道標は、延宝2年(1674)に東海道筋の雑色村から多摩川道に入る分岐に建てられたものですが、区画整理でここに移設、保存されています。正面に見える赤い建物は正徳5年(1715)建立の本堂で、薬師堂は左側にある覆いのかかった工事中の建物のようでした。薬師堂には行基の作といわれる本尊薬師如来と左右に弥陀釈迦二尊が安置され、本堂も含めて多くの仏像があるようですが、全て非公開。境内には祈れば乳が出ると古くから信じられていたイチョウの木が2本あり、その下に元禄3年(1690)に建てられた「銀杏削取折取禁制碑」がありました。イチョウの木の垂れた乳を削ったり折ったりする人たちが多かったようです。他にも境内には江戸末期のものと思われる富士講碑がありました。



▲長谷川雪旦　矢口古事

門を左に出て交番で右折し、少し行くと大綱山光明寺、現宝幢院です。前回訪れた鵜の木村光明寺は元真言宗の名刹でしたが、第3世行観の時に浄土宗に改宗しました。行観はそれを惜しんでここに真言の寺を建て、寺は宝幢院と院号で呼ばれるようになりました。山門を入ると左手に鐘楼があります。梵鐘は延宝9年(1681)に多摩川の河原で鋳造されたもので、大田区文化財になっています。正面の本堂は一部にガラス細工のような意匠が施された現代建築ですが、不思議と境内全体の印象に違和感はありませんでした。

六郷八幡宮から六郷渡

宝幢院から東南方向へ約1km、六郷八幡宮に向かいます。六郷神社は古くは八幡神社と呼ばれ、この地域の総鎮守でした。境内には本殿の右後ろ方に八幡塚と呼ばれる古墳があり、図会の挿絵でもタイトルは「八幡塚八幡宮」となっています。草創に関しては「鎌倉右府将軍頼朝卿安房国より大軍を卒し鎌倉へ入り給ふ頃、此所にて籏を建軍勢の著到を記し給ひし旧跡なりといへり。勝利の後、鎌倉鶴岡八幡宮を勧請し給ふとぞ」と図会にはありますが、他にも諸説あるようです。ここで必見は社務所の前庭にある石造の狛犬です。台座には貞享2年(1685)に六郷中町の17人の同行が願主となって石屋三右衛門に造らせたことがはっきりと読み取れ、保存状態もよく、何よりそのユーモラスな顔立ちがかわいらしい狛犬です。

西門の脇参道を出て六郷橋に向かう道は旧東海道の幅員をよく残している部分です。ここから京急六郷土手駅方向に向かう途中、左手にある北野天神は六郷の渡し跡で、その説明板がありました。神社から見える六郷橋脇の緑地には、大正14年(1925)に架けられた六郷橋の橋門と親柱が保存されていました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・中村貞子
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

友の会 特別企画

「インド古典舞踊の鑑賞」

出演　インド古典舞踊ティラナ(Tillana Tokyo)

◆友の会では昨年8月に「特別企画」として富岡製糸場関連の講演会を行い好評でしたが、このたび「特別企画」の第2弾として、インド古典舞踊の鑑賞会を行うことになりました。インド古典舞踊はなかなか見る機会もなく、とても珍しいものです。この機会に皆さんお誘いあわせの上、奮ってご参加ください！

◆出演グループ略歴：
1983年より再三渡印しインド舞踊を極め、帰国後全国各地でインド古典舞踊の多彩な舞台を展開し、2007年に急逝した小澤陽子さんを師とし、その舞踊と哲学を受け継いで2007年より活動を開始したグループ。現在高野山東京別院で教室を開いており、各地のイベントに出演している。

- 開催日時：3月6日(金)15時～16時30分
  ※通常より遅い開始時間なのでご注意ください。
- 申込締切：3月5日(木)必着
  ※締切までの時間が短いのでご注意ください。なお、今回に限り受講票はお送りしませんので、受付でお名前を告げてください(定員を過ぎた場合のみ連絡)。
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：先着400人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：**会員、同伴者とも無料**

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

古文書講座

新年度の講座概要、第1期の日程、申込方法などについては3ページをご覧ください。

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●徳川家康没後400年記念　特別展
「大 関ヶ原展」

◆天下分け目の関ヶ原の合戦、この戦いを制した家康ですが、今年は家康が没して400年目にあたります。関ヶ原の合戦はなぜ起こり、どのような時代を作り出したのか、この合戦を新しい視点で見つめ、歴史の転換期を考える展覧会です。その「みどころ」をお話してもらえるよう齊藤学芸員にお願いしております。ご期待ください。

- 開催日：4月7日(火)17時～19時
- 申込締切：3月12日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール/1階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

友の会セミナー

第151回「絵島事件」と江戸歌舞伎

講師　菅野　俊輔さん(江戸文化研究家)

◆江戸時代の人々は、暮らしを楽しむことにかけてはまさに達人。なかでも一番の楽しみは、芝居見物。浮世の憂さを忘れさせてくれる芝居は夢のような別世界。憧れの役者を目の前で見て、おしゃれをして、おいしいものを食べて、それは武士であろうと庶民であろうと、皆同じ。時は正徳4年3月5日、大奥年寄絵島、山村座役者生島新五郎を密通の罪で配流、世にいう「絵島事件」大奥最大のスキャンダル！　真相はいかに?!
華やかな江戸歌舞伎の模様を菅野先生の軽妙な語り口で楽しませていただきましょう。

◆講師略歴：かんの・しゅんすけ
早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、早稲田大学エクステンションセンター、毎日文化センターなどで、江戸のくずし字や江戸学など江戸を楽しむ講座の講師を勤めながら、講演、著述、テレビ・ラジオ出演など多方面で活躍中。著書に『頭のいい江戸のエコ生活』(青春出版社)『江戸の元祖エコ生活』(青春出版社)監修

- 開催日時：4月25日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：4月13日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】大森恵美子(事業部会)

見 学 会

広重『名所江戸百景』周辺探訪－その12(王子 周辺)－

◆この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪します。探訪では広重『名所江戸百景』の世界にタイムスリップし、江戸の町の成立や発展、人々の生活や声などを身近に感じていただければ幸いです。今回は、飛鳥山から滝野川流域をめぐり、名主の滝をへて王子駅北口まで歩きます。毎年、大晦日になると関八州の狐が、何千と榎木の下に集まり、装束を整えどの狐も狐火を発しながら、王子稲荷に向かったという、広重「王子装束ゑの木大晦日の狐火」絵や、飛鳥山山頂からの眺望を背景に、花見の酒宴をはり、花見に浮かれ踊る人たちを描いた、広重「飛鳥山北の眺望」絵、などを訪ねます。所要時間は約3時間、JR京浜東北線「王子」駅北口で解散となります。
(今回、訪ねる広重の作品)「飛鳥山北の眺望」、「王子音無川堰球世俗大瀧ト唱」、「王子瀧の川」、「王子不動之瀧」「王子稲荷の社」、「王子装束ゑの木大晦日の狐火」

- 開催日：4月12日(日)　受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：12時15分　最終受付：12時45分
- 集合場所：JR京浜東北線「王子」駅中央口　改札出口
- 申込締切：4月2日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本　隆(事業部会)

岩松精さんのご冥福を祈ります

松原　良

友の会２代会長の岩松精さんが１月１７日ご病気のため逝去されました。83歳でした。岩松さんは独特の岩松節で展示ガイドのボランティアでも人気でしたが、友の会では主に事業部会、総務部会で活躍され、平成１７年から２年間会長として友の会の発展に寄与されました。

中でも事業部会では見学会の草分け的存在で、見学会資料の注意事項等を記した表紙の原形は岩松さんがつくったもので、いまだにこれが使われています。平成１５年に岩松さん案内の見学会がＡ社の取材を受けましたが、そこには「立て板に水、弁士である。事前の下調べはあるにしても、岩松さんの説明ぶりには、ただそれだけではない何かがある。造詣が深いのである。」と記録されています。

また総務部会では岩松さんは「えど友サークル」という洒脱なネーミングを考え出し、現在この呼称が定着しています。そして運営に行き詰まったサークルの面倒をみたりと大活躍でした。

このように私たちの良き先達だった岩松さんにもうお会いできなくなってしまったことはまことに残念としか言いようがありません。岩松さんのご冥福を心からお祈りいたします。

友の会ホームページの地図の操作について

友の会ホームページに掲載しています見学会、「江戸名所図会を歩く」の地図の使用方法が変更になっています。

ご参考のため、操作の一部を紹介します。

①で示すアイコンをクリックするとピンの名前リストが表示されます。

②で示すアイコンをクリックすると別のページに拡大した地図が表示されます。

会員優待のお知らせ

●特別展

会期残り僅か お見逃しなく！

「探検！体験！ 江戸東京」

会　期：12月２日(火)～３月８日(日)
休館日：毎週月曜日
会　員：無料(要会員証提示)
同伴者：一般240円、65歳以上120円、大・専門生190円
　　＊高校生、中学生[都外]は65歳以上と同じ。
　　＊都内在住・在学中学生、小学生、未就学児童は無料。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●徳川家康没後400年記念　特別展

乞うご期待！

「大 関ヶ原展」

会　期：3月28日(土)～5月17日(日)
休館日：4月6日(月)、4月13日(月)、4月20日(月)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
　　＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

●「リニューアル記念企画展」

会　期：3月28日(土)～5月10日(日)
休館日：4月6日(月)、4月13日(月)、4月20日(月)
会　場：常設展示室5階　第2企画展示室

催事のお申込方法

◆普通はがきに、
　①催事名(略名可)・開催日
　②会員番号(必須)
　③氏名(同伴者連記)
　を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
　　江戸東京博物館「友の会事務局」

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
　なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてから参加下さい。

会報＜えど友＞第 84 号
平成 27 年 3 月 1 日発行（奇数月 1 日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、佐藤幸彦、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、田端道宏、光田憲雄、中山達雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910